proof of life

嵐炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｐｒｏｏｆ　ｏｆ　ｌｉｆｅ

【Ｎコード】
Ｎ０７７４Ｚ

【作者名】
嵐炎

【あらすじ】
ついに来てしまった最後の時。
ーせめてオレが生きた証を残したい。

プロローグ（前書き）

嵐炎です（＾＾）

今回は鏡音三大悲劇の一つ、「ｐｒｏｏｆ　ｏｆ　ｌｉｆｅ」をリボーンで書いてみました。

ツナ視点です。

プロローグ

朝目が覚めて、ふと窓に目を向けると、外は真っ白だった。

「積もったなぁ…」

毎年この季節になるとこの辺りは雪は降るけど、こんなに真っ白になったのは初めて見た。

でもこんな景色を見れるのも今日で最後なんだな…。

だって今日は

オレがこの世から離れる日だから。

数ヶ月前に、オレは病気を患った。

それは「不治の病」と言われているモノだった。

その時に医者から余命を告げられた。

「せいぜい長くて5ヶ月でしょう」

でも実際は少し長く生きる事が出来た。

今日で１０ヶ月。

たぶん他の皆が気遣ってくれたからかな。

でもオレは皆に「不治の病にかかってる」なんて言ってない。

あ、違う。

言えなかった。

この事を知ってる人は他にリボーンしかいない。

皆には心配かけたくないから。

…え？何で今日なのか分かったかって？

夢で言われたんだ。

「今日で全てが終わる」って。

「ちゃおっす」

「リボーン…」

…この顔も見れなくなるんだな。

「…何かあったか、ツナ」

「…やっぱお見通しか」

リボーンに全てを話した。

さすがにリボーンも驚いたらしく、聞いた後は少し固まっていた。

「…そうか。ついに来たのか…」

「うん…」

「…大丈夫か？」

「…今も信じたくないんだけどね」

オレだって心の準備ってのが必要なんだ。

けど時間は止まってくれない。

「…とりあえず起きようかな」

「だな。皆下で飯食ってるぞ」

「うん、行こっか」

そうして下に降りていった。

そしてここで過ごす最後が始まった。

scene ? ―with guardian of storm―（前書

タイトルが長いw

獄寺とツナメインです。

scene ?　―with guardian of storm―

下に降りるとトーストの香ばしい香りがした。

「おはようございます。１０代目」

真っ先に声をかけてくれたのはやはり獄寺くんだった。

「おはよう」

「朝ごはん、出来てますよ」

「ありがとう」

テーブルに置かれているのはトーストと目玉焼き。

いつも普通に食べていたけど、これが最後の朝ごはんなんだな…。

味わって食べないと。

「…１０代目？どうかなされましたか？」

「ううん、何でも」

そう言ってトーストを口に入れる。

すると自然に笑みがこぼれた。

「１０代目、何かありましたか？」

「ん？…いや、何でもないよ」

「そうですか…今日の１０代目はいつもと比べて行動がゆっくりなので…」

やっぱり右腕だからか、見ている所が違うな。

「今日はちょっとのんびりしてたいんだ」

「そうでしたか」

ニッコリとした顔で獄寺くんは言う。

「…ねぇ、獄寺くん」

「何ですか？」

「もしもさ…オレが…」

黙ってしまったオレを不思議そうに見つめる。

「もしも…？」

…聞いてみようかなって思って聞いたけど、やっぱり言えない。

「もしもオレが死んだらどうする？」なんて。

「…やっぱ何でもないや」

「？　そうですか…」

そうしていつもより長めに朝ごはんを食べた。

「ごちそうさまでした」

「俺が片付けておきますね」

「ありがとう…」

ふと気になったけど、他の皆が見当たらない。

「ねぇ、山本とかはどこにいるか分かる？」

「アイツは確か…芝生頭とジョギングに行きましたよ。多分そろそろ帰ってくると思いますが」

「そっか。ありがと」

そう言ってオレはダイニングから出ていった。

scene ? —with guardian of rain and

山本と笹川兄と。

scene ? ―with guardian of rain and

こんな寒い日でもジョギングに行ったんだ…。

オレも一緒に行けたらよかったな。

とか思いながら玄関で二人の帰りを待つ。

だんだん何かが聞こえてくる。

二人の声だ。

「極限に寒いぞ！！」

「中に入れば暖かいっすよ、きっと」

ドアが開く。

「あー、暖けぇ」

「おぉ、極限に体がポカポカしてきたぞ！！」

お兄さんってオーバーリアクションだよな…。

とか思ってたらちょっと笑ってしまった。

「？　誰かいるのか？」
あ、聞こえてたみたい。
「二人ともお帰りー」
「なんだ、ツナか。ただいま」
「極限に沢田ではないか！！今帰ったぞ！」
そう言って二人はオレの頭を撫でる。
「やっぱり外寒い？」
「あぁ、急に降ったからあんまり走りたくなかったけどな」
笑いながら山本が言う。
「だが途中で雪合戦をして極限に楽しかったぞ！まるで子供の頃に戻ったようだったな」
あ、だから二人ともそんなに手が赤いんだ。
「オレもやりたかったなー、雪合戦」
そう言いながら二人の手を握る。
あぁ、冷たいな。

「ツナの手、熱いな…熱あんのか？」

「ん？今日は大丈夫だよ。てかずっと外にいたんだから山本の手が冷えてるんだよ」

「あ、そっか」

「最近沢田はずっと熱があったからな！極限に心配したぞ！」

実は昨日までは熱があって寝込んでいたから1階にいるのは他の皆にとっては久しぶりな事。

「ツナが完全復活したら一緒に雪合戦しような」

「極限にいい案だな！！約束だ！！」

「本当？嬉しいな」

二人には喜んだ顔でそう言った。

実際は切ないけど。

その約束は果たされる事はきっとないから…。

「…ツナ？」

「極限に今暗い顔をしたが、何かあったのか？」

え。

「何でもないよ！あ、用事思い出したからオレ行くね！」

階段を駆け上がる。

…焦った。

顔に出てたとは思わなかった…。

なるべく出さないようにしないと。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0774z/

proof of life

2011年12月21日20時55分発行